宿神としての妙見童女像

――度会氏の祖先祭祀と胞衣の祀り――

小林幸夫

（一）常明寺の妙見堂

かつて度会氏の祖先祭祀について論じたとき、尾上山の妙見堂に度会氏の胞衣を埋める習俗についてふれたことがある。[1] 先祖をまつる山宮祭と関係はあるとは思ったものの、納得のいく説明ができず、棚上げのままにしていた。あれこれと資料をあつめ、調べてはみたものの、なかなかはかがいかない。そこであらためて胞衣のまつりの意味を考えてみたい。そのささやかな試みが、妙見童女像をまつる度会氏の祖先祭祀を論じることにつながるだろう。

山田の小田橋をわたり、妙見坂をのぼると妙見堂がある（図1）。ここはかつて岡崎宮といって、貞観年中の昔から、妙見像を祀ってきた。その縁起について『勢陽五鈴遺響』（天保四年・一八三三）は、『岩屋本縁記』をひいて語っている。

岩屋本縁ノ一書甚信シ難シ書ナレトモ其書云貞観年中高主ノ童女小田河ニ溺死ス其屍ヲ不獲シテ妙見星ノ像ヲ獲テ此山上小祠ニ祭ト云今ニ彼後裔ノ人（※度会氏）此堂ノ後ニ胞衣ヲ瘞ノ故実ハ遺リタリ云云　毎事問ノ説大略同シ　岩屋本縁起云『度会氏遠祖大神主飛鳥末孫大内人高主貞観元年己卯十一月十五日一子前大物忌子入御贄川卒去十五才即時従御贄川淵底而得妙見星童形像奉居尾部御陵以西小田岡崎宮霊地利祈氏人之繁昌寿貞観二年十一月十五日一胞二人生男子宗雄冬雄也同三年十一月十八日同胞二人生男子春海秋並是也同四年十一月十五日亦同胞二人生男子冬綿春彦是也』（中略）又度会氏ノ胞衣ヲ此地ニ蔵ムルハ岩窟本縁ノ遺例ニ拠ルナルヘシ（「岡崎宮」）

『岩屋本縁記』は、大須真福寺所蔵『高庫蔵等秘抄』（永保二年・一〇八二書写）の寛文二年の転写本である。前稿に述べたように妙見堂（旧岡崎宮）は、貞観二年の創建と伝えられる（『勢州雑記』）。度会高主の娘が、小田河（勢多川の一名）に沈んだが、その溺死体はついに見つからず、妙見像を川底より得た。それを尾上陵（尾部陵）の西、岡崎宮にまつったのである。以来、度会氏はこの宮に子孫の繁昌を祈ってきた。『岩屋本縁記』（「岡崎宮妙見本縁」）についてはのちに述べるとして、注目したいのは、妙見堂の後ろに度会氏の胞衣を埋めるということである。「度会氏ノ胞衣ヲ此地ニ蔵ムルハ岩窟本縁ノ遺例ニ拠ルナルヘシ」とあるが、これだけでは、それがどのような習俗か、いつごろから伝えられてきたものか、不明というしかない。「岡崎宮妙見本縁」によれば、勢田川に沈んだ娘は、「大物忌の子」、すなわち外

宮に御饌の奉献をおこなうお子良であった。神に仕える巫女の役は、外宮の場合、度会氏の童女が務めることになっていた。

妙見堂（岡崎宮）に妙見童女像がまつられて以来、双生児の誕生が三年のあいだつづき、六子をえた。以来、度会氏の胞衣を妙見堂の後ろに埋めてきたという。この地に妙見像をまつり、管理してきたのは、度会氏の氏寺、薬師如来を本尊とする常明寺である。かつて間の山の古市にあって、広大な伽藍を誇っていたこの寺は、もとは真言宗であったが、寛永年中に天台宗に改宗した。妙見堂に度会氏の胞衣を埋めることと、常明寺がどのようにかかわっているものか、その消息をまずはたずねてみたい。

（二）神萱落社の茅萱祭

いまは退転してすでにないが、かつて神萱落社は常明寺の境内にあった。十二月十日、この社でとりおこなわれた茅萱祭について述べて、常明寺とこの神事の性格を理解しておこう。この神事をとりしきるのは、常明寺の別当職・常楽坊の社僧である。『常明寺別当職年中行事式』（神宮文庫蔵）は、茅萱祭について、

一、先内陣ニテ般若之法則有之、大般若経ヲ番之御禰宜衆御参勤被候間：：萱落社ノ前ニテ八王子ノ祭文有。別当常楽坊之彼役也。

一、祭文終リテ後、案主社ニ飾リ有ル茅萱ヲ取ツテ常明寺住持ニ渡シ、御かじ有リ。

と記録している。常明寺の寺僧が内陣にて大般若経を転読したあと、神萱落社の前で、別当職の常楽坊が八王子祭文を唱える。そして社頭に飾った茅萱を、常明寺の住持が加持をして、度会氏の門人に配った。茅萱を厄払いの護符としたのである。なおここにいう「八王子祭文」とは、『牛頭天王縁起』であり、宇治・中村の八王子社、あるいは常明寺や神萱落社などの寺社を拠点とした寺僧や陰陽師によって制作された。[2] 神宮文庫蔵本「八王子祭文」をもってその一部を示しておこう。八人の王子は、それぞれに、「相光天王」、「魔王天王」、「倶魔羅天王」、「徳達神天王」、「羅侍天王」、「達尼満天王」、「侍神天王」、「宅神相天王」の名が与えられている。ここに名前のあがる八王子は、牛頭天王の疫神としての機能を、それぞれにわかち与えられた行疫神である。たとえば、第一、第二の皇子を示せば、

第一ノ王子ノ御名ヲハ相光天王　誓願ニ云　若人千万人超過思ワン我名ヲ百返称セハ必勝シメン

第二王子ノ御名ハ魔王天　誓願ニ云ク　若田畠作スルニ諸ノ悪虫ノ食損ニ我名ヲ九返称セハ必五穀成就セン

というぐあいである。牛頭天王が八人の王子を引き連れて竜宮を去るとき、その眷属八万四千六百五十四の神々のなかの「大悪神」として「蛇毒気神」がいた。

其時ニ神王ハ龍宮ニ着キ給フニ龍宮照耀ヤク。龍宮驚テ出向テ事由ヲ承テ女子計ヲ奉事既給シ。八箇年住給間八柱ノ王子タチヲ生給フ。其御眷属八万四千六百五十四神也。其中ニ大悪神御坐。蛇毒気神王ト申。

『簸荳抄』は、「蛇毒気神」を八王子の一人にかぞえて、その神格を「蛇毒神トハ、龍宮ニテ七人ノ王子ヲ生シ給フ時、衣那ト月水ヲ血逆ノ池へ捨給フ、彼レガ集テ蛇毒気神ト成給フ」と説明する。七人の王子の胞衣と月水が、凝り固まって「蛇毒気神」はうまれたのである。茅萱祭で誦みあげられる「八王子祭文」が、「蛇毒気神」を「大悪神」とすることからも、この神がとりわけ恐ろしい疫神とみなされていたことがわかる。

神萱落社の茅萱祭は、度会氏の氏寺でいとなまれた疫神祭祀の祭であった。胞衣の祀りと度会氏の祖先祭祀を考える場合、常明寺と神萱落社を、「（外宮の）八王子信仰の根拠地」[3]とする山本ひろ子氏の指摘は、とても重要な視点となるだろう。

（三）胞衣の祀り

山田（外宮）と宇治（内宮）の境に間の山はある。かつてここ尾上山は「墳墓の地」であったのを、参詣道がひらかれて墓地はほかにうつされた。[4] 旧参宮街道（尾上町、倭町、古市街道）がにぎわった時代には、尾上町から妙見堂に通ずる坂道が、参詣道であった。[5] 妙見堂は、この葬地の入口にあって、そのうしろに度会氏の胞衣が埋められた。

『神境紀談』（巻三「岡崎宮」）にはつぎのように記録される。

岡崎ノ宮ハ小田ノ橋ト尾部坂トノ中間ノ北ノ山ニアリ。今ニ妙見堂ト称スル是ナリ。貞観元年ニ度会氏ノ遠祖大内人高主ノ女メ大物忌ノ子御贄川ニ没テ溺死ス。即時ニ妙見星ノ童形ノ像ヲ淵底ヨリ探得タリ。其ノ像ヲ岡崎ノ宮ニ居ヘ奉リテ氏人ノ繁昌ヲ祈リ給ヒシカハ、翌年ヨリ毎年ニ双子ヲ産テ三年ニ六子ヲ得タリト岩屋本縁ニ載セタリ。又妙見堂ノ後ロニ度会氏ノ氏人ノ胞衣ヲ埋蔵ノ所アリ。古記ニハ見エサレトモ古ヘヨリ斯ル例トテ今尚此レヲ遣テ蔵スコトナリ。按スルニ彼ノ六子ノ胞衣ヲ此ニ蔵シテ故実トナリ将来レルニヤ。

妙見堂（旧岡崎宮）に妙見像を祀って以来、前述したように、双子の誕生が三年のあいだつづき、度会春彦以下、六人の兄弟がうまれた。彼らの胞衣を妙見堂に埋めて以来、胞衣の祀りがつづけられてきたというのである。[6] それにしてもなぜ葬地の入口にある妙見堂に、胞衣は埋められたのか。

胞衣を葬地や墓などに埋める習俗は、産育習俗として全国各地に伝えられている。[7] また足利義尚の胞衣納めが、洛東・清閑寺の西、「歌の中山」で行われたことを『蜷川親元記』が記録している。[8]「歌の中山」は、黒田日出男氏によれば、「境界をなす峠」であった。この一例からしても、胞衣を墓地や境界の地に埋めるのは、珍しいことではなかった。度会氏の場合も、墓地、境界の地でおこなわれた胞衣納めと考えてよい。それならば墓地や境界の地でおこなわれるところに、この行事の意味があったと考えてよかろう。

そのことを考えるにあたって、金春禅竹の『明宿集』は、ひとつのてがかりを与えてくれる。坂越の浦に流れ着いた秦河勝が「宿神」と祀られる次第をつぎのように述べる。

（河勝は）化シテ神トナリ給フ。当所近離ニ憑キ祟リ給シカバ、大キニ荒ルル神ト申ス。スナワチ大荒神ニテマシマス也。コレ、上ニ記ストコロノ、母ノ胎内ノ子ノ胞衣、褌（チハヤ）ノ袖ト申セルニ符号セリ。胞衣ワスナワチ荒神ニテマシマセバ、コノ義合エリ。ソノ後、坂越ノ浦ニ崇メ宮造リス。次ニ同国山ノ里ニ移シタテマツテ、宮造リヲビタタシクシテ、西海道ヲ守リ給フ。所ノ人、猿楽ノ宮トモ、宿神トモ、コレヲ申タテマツルナリ。ココヲ以テモ、翁ニテマシマスト知ルベシ。サレバ翁ノ御事、大荒神トモ、本有ノ如来トモ崇メタテマツルベキ也。秘文ニ云、「意荒立時、三宝荒神。意若寂時、本有ノ如来」。コノ文ノ心ヲ知ルベシ。

河勝が坂越の浦に荒神とまつられる来歴を語って、宿神としての「翁」の二面性が述べられる。翁とは、こころ荒立つときは、「三宝荒神」となり、こころしずかなるときは、「本有ノ如来」のごとき存在となる。「秘文ニ云」として引かれる「意荒立時、三宝荒神。意若寂時、本有ノ如来」なる一文は、『三宝荒神縁起』にも見える文辞である。河勝が翁の化現であることを述べる文脈のなかで、「胞衣ワスナワチ荒神ニテマシマセバ」と説明されるのだが、「胞衣」を「荒神」とする次第については、もう少し説明がいる。

『三輪流神道諸大事口決』（神宮文庫）は、出産にそなえての護符と加持祈祷の呪文について記し、「衣那荒神」についても言及している。

求子護大事　欲レ求レ子ヲ者此ノ護ヲ掛レハ忽ニ懐妊スル也。認様

宿神としての妙見童女像

宿神としての妙見童女像

口伝ト者母ノ生気ノ方ノ水ヲ用テ此護ヲ書。加持ニハ薬師不動観音毘沙門ノ咒ル也。

愛敬大事　守ニモ用ル也。加持ニハ愛染毘沙門ノ咒ヲ用。

易産大事　守ニモ用ル也。加持ニハ千手観音ノ真言ヲ用。

難産符　薄様紙ニ只符計ヲ書。五字ノ咒ヲ以加持シ与ル也。

後物大事　衣那滞ル時此符ヲ書。此ノ真言ヲ以加持シ与ル也。

衣那荒神　後物不レ下此ノ大事ヲ行フ。荒神ハ血気凝テ為レ神故ニ衆生ノ倶生神ト云モ此神也。麁乱神トモ云。

後物のおりないとき、衣那荒神の加持をとりおこなう。衣那（胞衣）は、血気が凝り固まったすえに荒神となったのである。それは衆生にとっては倶生神であり、麁乱神である。いわば恐ろしい祟り神と考えられた[9]。しかしそれはこの荒神の一面にすぎない。胞衣のもうひとつの性格は、騎馬武者の「母衣」にたとえて説明される。

母衣ト者表二衣那一。母ノ胎内ニ居コト十月也。此ノ衣那ヲ着スル故ニ寒熱ノ障リ無シ。此ノ故ニ表二障リ無キコト一也。

母衣が武者を矢からまもるように、胞衣は胎児を保護してくれる。いわば守り神である。『三宝荒神縁起』にしたがえば、こころ荒立つときは荒神となり、こころしずかなるときは如来のごとき存在となる。いわば「翁」のごとき宿神の性格を、胞衣（荒神）はそなえているのである。こうして「衣那荒神」の二面性が語られている。

こうした性格をもつ胞衣が、妙見堂のうしろに埋められたのであれば、妙見像の信仰と胞衣納めが、どのように結びついていたのか、その習俗をささえる信仰のかたちが問われなければならない。

（四）妙見星の祀り

度会氏の山宮祭は、はじめ岡崎宮に童女形の妙見像をまつっておこなわれたが、変転を経て、岩戸山の東麓、通称「山宮が谷」にところを移した。それは妙見星をまつって、祖先の霊に子孫の繁栄と五穀の豊穣を祈るものであった（『勢陽雑記』[10]）。妙見菩薩とは、北辰尊星妙見大菩薩とも尊星王とも称し、北極星を仏格化した諸星の王とされる。また一切諸物の善悪を記録する、国土の守護神とも考えられた。伊勢外宮の摂社・高宮（多賀宮）について記録する『元応二年高宮御事』が、『北辰妙見尊皇菩薩陀羅尼経』を引いて、妙見菩薩について説明している[11]。

北辰妙見尊皇菩薩陀羅尼経云、ソノトキ妙見菩薩仏ニ白シテ言サク、我ハ北辰菩薩。名ヲ妙見ト曰ウ。今神呪ヲ欲（まそ）ウトキ、国土ヲ擁護シ、所作甚タ奇特ナリ。故ハト名テ妙見ト曰ウ。閻浮提ニ処シテ衆星ノ中ノ最勝ナリ。神仙ノ中ノ仙ナリ。菩薩ノ大将也。上位ヲハ一字金輪尊星王ト名ク。中位ヲハ北辰妙見尊星ト名ク。下位ヲハ泰山府君ト名ク也。北辰、妙見、泰山府君、異名同体也。北斗ハ七星ノ異名也。北ハ七星、北方ニ居ル。斗ハ七星羅列ノ形。大国ノ斗ニ似タリ。故ニ北斗ト名ク。

ここに泰山府君のことがふれられるのは、高宮は、別名を泰山府君といい、豊受大神の荒魂をまつるゆえである。泰山府君とは、仏教の閻魔大王と習合して、人間の寿命と福禄を支配する神として、あがめられてきた。この泰山府君と異名同体の星宿が、北辰星と妙見である。妙見とは、もろもろの星のなかにあって、最勝の星にして、その上位にあるのを一字金輪尊星王、中位にあるのを北辰妙見尊星、下位にあるのを泰山府君という。外宮・高宮にまつられるのは、この泰山府君である。

岡崎宮に妙見星を奉じたのが、度会春彦である（「岡崎宮妙見本縁」）。度会氏には四門があり、うち一門、三門の家系は絶えて、二門と四門のみがつづいた。春彦は二門・飛鳥の末孫であり、その後裔が松木氏を継いだ。ただし、「岡崎宮妙見本縁」が伝えるのは、妙見宮の縁起が伝承する春彦であって、度会系図の記録する実在の春彦ではない。

「岡崎宮妙見本縁」は、その前段に、度会氏飛鳥の末孫・高主が、岡崎宮に妙見童女像をまつって以来、双生児の誕生が三年つづいたことを語る。宗雄・冬雄、つぎに春海・秋竝、そして冬綿・春彦の男子六人である。

妙見本願度会氏遠祖大神主飛鳥末孫大内人高主、貞観元年己卯十一月十五日、一子前大物忌子、入二御贄河一卒去、〔十五才〕、即時従二御贄河淵底一而、得二妙見星童形像一、奉レ居二尾部御陵以西小田岡崎宮霊地一利、祈二氏人之繁昌一、爰貞観二年十一月十五日、一胞二人男子生、宗雄・冬雄是也、同三年十一月十八日、同胞二人子生、春海・秋竝是也、同四年十一月十五日、亦同胞二人男子所生、冬綿・春彦是也

仁和四年十一月十八日神主春彦任二妙見尊星王霊託一率二氏人等一向二清浄山谷一奉レ祭二本地妙見大菩薩日光月光十二神王二十八宿諸天三宝孔雀王帝釈神等一也、以遊年戌亥位歳為祭年也、今号二山宮祭一是也、凡岡崎宮座妙見北斗尊星者神主等妻子専供養尊重帰依相応験仏也、此尊之変化之星者名曰軸星所居之宮殿名之曰紫微宮軸星者国王也、故名之曰一字金輪也諸星主也、須弥頂上有宮殿名紫微也身余星三万五十由旬那下在之宿曜道此金輪習四辟不動亦軸星付星七星九曜十二宮亦八宿凡六禽天五行日月五星地五行木火土金水五大也

後段では春彦が、妙見尊星王の霊託により、氏人を率いて清浄山に妙見をはじめとする星宿をまつったことを記して、これを山宮祭のはじめとしている。この祭は妙見堂（旧岡崎宮）に、度会氏の神主・妻子が妙見星をまつることからはじまったという。妙見星に度会氏と子孫の繁栄を祈ったのである。もちろんこのことは、事実を伝えるものではなく、度会氏の祖先神話であることは、かつて論じたところである。[12] 童形の妙見像が、外宮と内宮の境にまつられるのはなぜか。もちろんこれも、妙見星の性格にかかわっている。

宿神としての妙見童女像

（五）妙見菩薩の像容

「岡崎宮妙見本縁」は、この妙見菩薩のすがた、かたちを童形像と伝えている。

貞観元年己卯十一月十五日、一子前大物忌子、入二御贄河一卒去、〔十五才〕、即時従二御贄河淵底一而、得二妙見星童形像一川に沈んだ娘の形をうつしたものであれば、童女像といってもいいのだが、『伊勢参宮名所図会』（巻之四・「岡崎宮」）も、「長さ八尺ばかり、禿髪にして面容童女のごとく、左りの二指を空に指さし、右に剣持給へり」と記しているように、面ざしは童女のごとき童形の像である。

この妙見像は、現在、読売新聞社の所蔵品となっており、『仏教美術事典』（平成十四年）に写真と解説がのせられている。それによれば、「像内に一三〇一（正安三）年法印大和尚院命が造立した旨の墨書銘があり」、「最も古い鎌倉時代の妙見菩薩像であることが知られる」という。度会家の禰宜によってまつられ、伊勢山田の常明寺に安置されていたものが、明治の神仏分離で廃寺となって、寺を離れたと伝えられる。木造、寄木造、玉眼、像高一五五・七センチ。「美豆良を結った頭髪の形」からみれば、童女像というよりも、むしろ男子の童形像というほうがふさわしい。「岡崎宮妙見本縁」は、勢田川に沈んだのは、大物忌の子とすることで、この像を童女としているのである。伊勢大神につかえる巫女のかたちを写しているとするのである。

いずれにしても童子像と伝えるところに、この妙見菩薩像の性格があらわれている。妙見菩薩の像容については、『阿娑縛抄』（巻第百四十四「妙見」）が、つぎのように記す。

又外書中殊奉崇之。陰陽周易術道等皆所崇也。或俗形束帯。或童子形。或童女形。皆是外法所崇敬像歟。

宿神としての妙見童女像

童女、童子形の妙見像は、「外法の崇敬する所の像か」といって、「陰陽周易術道等」の崇める像だとする。占卜・祈祷の術をこととする陰陽道の輩によって奉祀されたというのである。そのことの検討はあとにゆずることにして、まずは妙見菩薩の像容についてみてゆきたい。

『別尊雑記』（巻第四十八「妙見」）のしめす「妙見」の図像によれば、妙見はふたつの面相をもっている。ひとつは柔和で穏やかな表情をもつ像である。こちらは左手に北斗七星を持して坐している[13]（図2）。もうひとつは立像である。これは右手に剣をもち、左手には金輪を持って立つのだが、怒りの形相をあらわにしている（図3）。『別尊雑記』は、その妙見菩薩の憤怒の形相について、つぎのように説明している。

又有菩薩所現忿怒像儀。形如前所説四臂像。但黄色。開色開口。逆髪中有七蛇。除前所持日月輪。右手持節刀。左手持金輪。餘無相違。

妙見菩薩の怒りの形相は、逆立つ髪と、頭上の七匹の蛇によって示されている。こちらは「身意色」と表記されるように、怒りをあらわす。さらにこの菩薩が、筆と紙を持つのは、人間の善悪を記録するためのものである。これについて『別尊雑記』は、

司命司録二神随従左右［毎至庚申日巡転於閻浮提。書記衆生善悪所作事］

と記している。冥官たる泰山府君と同じ性格が、図像にも示されているといえる。妙見菩薩が、泰山府君と異名同体といわれるゆえんである。

妙見菩薩が、柔和と憤怒、このふたつながらの相貌をもつことは、さながら『明宿集』のいう翁の性格にひとしい。こころしずかなるときは如来となり、こころ荒立つときは荒神のごとし、というのが翁であった。

いまひとつ、妙見菩薩の憤怒の形相が、逆立つ髪と蛇によってあらわされていることに注目したい。これはあたかも謡曲『蝉丸』に登場する、延喜帝第三の御子、逆髪のすがたにかさなる。

これは延喜第三の御子、逆髪とはわが事なり。われ皇子とは生るれども、いつの因果のゆゑやらん、「心よりより狂乱して、辺土遠境の狂人となって、緑の髪は空さまに生ひのぼって撫づれども下らず」

蝉丸の姉宮は、狂乱のゆえに捨てられて、逆立つ髪の異形の人となった。関明神の社記が伝えるように、彼女は逢坂山に「逆髪の宮」としてまつられる。もちろん伝承にすぎないにしても、逆髪の宮のすがたは、逢坂山の境を守る神、坂神であることを示している[14]。

同じことは、奈良市奈良阪町の「奈良豆比古神社」の縁起についてもいえる[15]。桓武天皇の御宇、皇子春日王は不慮の病によって、逆髪となり、奈良山に捨てられる。『平城坊目考』は、奈良豆比古神社の縁起を引いて、その次第をつぎのように記している。

縁起曰、桓武天皇御宇、春日王不慮有疾［生逆髪白癩病］。因茲密退皇都、隠居奈良山。所謂当社之地是也。

春日王は、坂神として奈良坂・奈良豆比古神社にまつられたのである。逆髪の宮に同じく、春日王の逆髪もまた、坂神のシンボルとして伝えられてきたのである。

それならば間の山の妙見菩薩も、妙見坂にあって坂神として信仰されていたと思われる。外宮と内宮の境の地にまつられた童形の妙見菩薩は、境の神・宿神の性格を有しているのである。

（六）宿の童女神

服部幸雄は、「宿神」としての「摩多羅神」を論じて、摩多羅神が、「少なくとも二種類の異なった祀られかたをした」ことを指摘して、その性格を二つに整理している[16]。

①辺境の守護神であり、秦氏の後裔にとっては一族共同体の守護神として奉祀される。

②天台系（慈覚系）の寺院の常行堂の後戸に、仏法の守護神として祀られる。

いまは天台宗の摩多羅神信仰についてはふれない[17]。ここでは「一族共同体の守護神」として「辺境」にまつられる宿神の性格について論じてみたい。というのも、外宮と内宮との境にまつられ童形の妙見菩薩像は、度会氏を守る宿神であったと考えられる。

『明宿集』は、宿神の威徳と由来を、星宿信仰との関連から説明して、つぎのように述べる。

翁ヲ宿神ト申タテマツルコト、カノ住吉ノ御示現ニ符号セリ。日月星宿の光下テ、昼夜ヲ分チ、物ヲ生ジ、人ニ宿ル。三光スナワチ式三番ニテマシマセバ、日月星宿ノ儀ヲ以テ宿神ト号シタテマツル。宿ノ字ノ心、星下テ人ニ対シ、ヨロヅノ業ヲナシ給フ心アリ。イヅレノ家ニモ呼バレ給フベキ星宿ノ御恵ミナレドモ、分キテ宿神ト号シタテマツル翁ノ威徳、仰ギテモナヲ余リアルベシ。

服部によれば、密教の星宿信仰は、北極星を妙見菩薩の化現として仰ぐのが根本であるという[18]。禅竹もまたここで、日月星宿をもって、翁（宿神）の威徳を語っている。星宿の恵みが、宿神としての翁の威徳に、そのままつなげて語られている。禅竹のこの姿勢は、宿神の「御影」を説明するときでも変わらない。「日月星宿の儀をもって宿神と号す」（『明宿集』）とするゆえんである。

御立烏帽子ワ、両曜アラタナル日月ヲ現ワシ、御数珠ワ、星宿ヲ連ネ給エル御姿、御檜扇ワ、十二月ヲ表シテ、昼夜ニ捨テズ衆生ニ結縁シ給フ御姿、水干ワ、母ノ胎ニシテワ胞衣トイワレシ褝（チハヤ）ノ袖、九条ノ紫ノ御袈裟ワ、忍辱慈悲ノ衣、紫色ワ、コレ赤色ニモアラズ黒色ニモアラズ、スナワチ中道実相ノ御姿ナリ、御履（クツ）ワ地ヲ表セリ

宿神としての妙見童女像

宿神像は、立烏帽子に水干、その上に紫の袈裟をまとい、履をはき、手に数珠と檜扇をもつ。その着する装束とともに、その意味するところは日月星宿などをもって解釈される。これが『明宿集』の宿神論の特長といえる。

いっぽう妙見坂の妙見堂は、かつては岡崎の宮と称されて、度会春彦が度会氏を率いて、ここに星宿をまつった。これが山宮祭のはじめだという（『豊受皇太神宮諸祭由緒記　下』）。

凡ソ仁和四年十一月十八日、神主春彦岡崎ノ宮ノ霊託ニ任セ、氏人等ヲ率キ清浄ノ山谷ニ向ヒ、日月諸星廿八宿五星ヲ祭リ奉リ、今山宮ノ祭ト号スル是ナリ、凡ソ神主等ノ妻子専ラ岡崎ノ宮ノ星霊ヲ祈ルベキナリ

度会氏の尊崇帰依する「応験仏」（「岡崎宮妙見本縁」）、妙見菩薩に一族の繁栄を祈ったのである。この応験仏が、かさねて述べてきた童形の妙見菩薩である。柳田国男をはじめとする民俗学の知見をかりれば、宿神は小童の形をもってあらわれる[19]。秦の河勝もまた小さ子神であった。小童のすがたで天皇の夢にあらわれて、壺に乗って三輪明神の神前に流されてきたことを告げる（『本朝神社考』）。宿神としてまつられた河勝の故事を思えば、妙見菩薩が、童形の像容であることも理解できる。柔和と憤怒、二つながらの力を内に秘めて、妙見の童女像は、度会氏を守護する宿神として尊崇されていたのである。妙見堂のうしろに胞衣が埋められるのは、度会氏の守護神に、一族の繁栄を祈るためであった。

（七）妙見を祀る者

山宮祭は妙見星をまつる祭星の行儀である。春彦が岡崎の宮に星霊をまつった先例にならって、度会氏は、一族の繁栄と五穀の豊穣を祈ってきた。『藤園雑纂』（神宮文庫蔵）は、山宮祭についてつぎのように

記している。

妙見堂ノコト石屋本縁ニ載スル故事覚束ナキコトナリ。但シ高主モ春彦モ陰陽道信向ノ人ナリ。尤モ妙見星ヲ祭ルコト、此頃一般ノ風儀ニテ、山宮祭ト云フモ太山府君ヲ祭ルナリ。山宮祭ト云コトハ山君祭ト称ヘタル山君ヲ山宮トナセルニテ、山君スナハチ太山府君ノ略称ニテ北辰星ノコトナリ。

妙見星をまつる山宮祭は、太山府君の祭であるという。妙見と太山府君とを同体異名とみなす考え方が、ここにもいきているし、山宮祭が陰陽道と習合して伝えられてきたことを思わせる。山宮に妙見星をまつり、高主や春彦を「陰陽道信仰の人」として奉斎してきた人々が、この祭にたずさわっていたのである。

『阿娑縛抄』（巻第百四十四「妙見」）によれば、三井寺には妙見尊星王の秘法が伝わるという[20]。

帖云、北辰妙見也。又云尊星王是也。（略）此法三井寺秘法也。尊星王法是也。但彼秘書一結持之。彼行儀非真言家所為。以陰陽家作法為依憑歟。

この尊星王法は、真言の行儀ではなく、陰陽家の作法にならったものだとすれば、真言の妙見尊星王法がすでに、陰陽道と習合しているのである。前にも述べたように、『阿娑縛抄』は、童形の妙見像は、陰陽家の崇めるところであり、「外法」の崇敬する像であると記していた。

しかし、度会氏の山宮祭は、陰陽師も加わって、「外法」の妙見童女像を一族の守護神と仰いでつづけられた。その行儀の次第を『勢陽雑記』（度会郡「山宮が谷」）は、簡略に伝えている。

此谷にて山宮の神事といふは毎年霜月の下旬に吉日を撰び米、大豆、麹、酒、塩、柑子、海藻、香、灯心、松、油、等種々の供物を調進して正禰宜権禰宜集会して、面々篭をぬり、火を焼き酒宴して祭る事あり。是妙見星を祭ると也。山宮の神事の祝詞にも妙見星を祭りて田園五穀養蚕を祈ると有り。亦古老の伝に、古は高原ノ前山にて祭りしを、後に此所里近きに便りて祭りし也。泰山府君を祭るなり、共いふ。鼓が岳は当地の名山なれば山祭りにてもあるべし。山を祭るに、妙見星、又我氏人に恵みある由来あればあわせ祭るにや。山宮の祝詞を按ずるに、寛平二年以来の例を用ひて祭るといふ詞有り。又云ふ、当祭は於二継橋郷前山辺一雖レ令レ勤行一。撰二定清浄地於滝谷一。建武二年祈奉レ遷二祭庭於当地一也

外宮の山宮祭は、その始め、岡崎宮に妙見星をまつってはじまったが、変転をへて岩戸山の東麓、通称「山宮が谷」でいとなまれた。その神事の次第は、かつて論じたことがあるので、ここでは省略する[21]。この祭が、十一月におこなわれたのは、春彦をはじめとする高主の六兄弟の誕生月にちなんでのことでもあろうが、本来は、先祖の星霊に「田園五穀養蚕」の恵みを感謝する霜月祭であった。

この山宮祭に時を同じくして、十一月十六日の夜、大神宮法楽の神楽が、常明寺でとりおこなわれた[22]。そこに度会二門の氏社（八王子社）に奉仕する陰陽師が加わっている。かれらは、度会春彦を「陰陽道信仰の人」として奉じて、妙見星をまつる山宮祭にも加わったように、常明寺の法楽神楽にも奉仕したのであろう。その神楽には、妙見菩薩を讃える一曲が伝えられている[23]。

かれら陰陽師は、妙見堂の祭にも、別当職常楽坊の配下として加わっていたと思われる。妙見童女像のまつりに奉仕した山田の陰陽師の実態については、稿をあらためて論じてみたい。

[注]

（1）拙稿「度会春彦本縁―度会氏の祖先祭祀―」（「東海学園　言語・文学・文化」第七号）二〇〇八年

（2）（3）山本ひろ子「異神の像容―牛頭天王島渡り祭文の世界」

（『異神』一九九八年）

（4）拙稿「間の山考―歌比丘尼と間の山節―」（『東海学園　言語・文学・文化』第六号）二〇〇七年

（5）野村可通『伊勢の古市夜話』三重県郷土資料刊行会　一九七六年

（6）野村可通によれば、戦前まで、乳の神様、子育ての神様、子授けの神様として遠方から妙見堂に参詣する人も多かったという（『伊勢の古市夜話』）。

（7）『日本産育習俗資料集成』恩賜財団母子愛育会編　一九七五年

（8）黒田日出男「中山―中世の交通と境界地名」（『境界の中世象徴の中世』所収　一九八六年）。胞衣納めを論じたものには、ほかに横井清に『的と胞衣』（一九八八年）がある。

（9）山本ひろ子「宇賀神―異貌の弁才天女」（『異神―中世日本の秘境的世界―』所収）

（10）（12）前掲拙稿（1）参照

（11）『伊勢神道集』（東福寺善本叢刊第二期）所収。

（13）大正新脩大蔵経（図像・第三巻）

（14）服部幸雄「逆髪の宮」（『宿神論―日本芸能民信仰の研究』）二〇〇九年

（15）藪田嘉一郎『能楽風土記―能楽の歴史地理的研究』に「奈良奈良坂村旧記」が収められている。

（16）服部幸雄「宿神論」（『宿神論―日本芸能民信仰の研究』）

（17）天台宗の摩多羅神信仰についての論考は、景山春樹「摩多羅神信仰とその影像」（『神道美術』所収　一九七三年）、山本ひろ子「摩多羅神の姿態変換」『異神』所収）、村山修一『本地垂迹』（一九七四年）、服部幸雄「後戸の神」（『宿神論―日本芸能民信仰の研究』所収）などがある。

（18）前掲（16）服部論文

宿神としての妙見童女像

（19）柳田国男『毛坊主考』（定本九巻）、堀一郎「夙（宿）と宿神」（『我が国民間信仰史の研究（二）』）。柳田国男は、「守宮を小童の形に想像した古意を汲むべきものであらう」と述べ、堀一郎もまた「守久神が小童の姿を仮つて夢に現はれ」というふうに、小さ子と宿神の関係を指摘する。

（20）山本ひろ子「摩多羅神の姿態変換」（『異神』所収）

（21）前掲拙稿（1）参照

（22）『常明寺縁起』（神宮文庫蔵）に霜月十六日の外宮法楽神楽のことが記録されている。

「雄略二十二年、外宮御幸臨已来太神宮法楽神楽、此山毎年十一月十六日後夜物二詣此寺一百余人神楽男巫八乙女翻二羅綾袂一内宮八十末社外宮四十末社深秘歌唄哩哩有楽詞拍子也。誠是天巌戸前八百万神達集給、太神宮法楽砌面白日于レ今不レ絶事難レ有云々」

ここに加わる「巫」が、度会二門の氏社の祭に奉仕する陰陽師である（『神宮典略』「八王子社祝」）。

（23）伊勢神楽に「五方の遊び」の一曲がある（『天文本神楽歌』）。

「いや東に日りう日を出し　いや西には夕月夜を照らし　いや北には妙見大将軍の殿造り　南には仏の御国とかや」。ここにうたわれる「妙見大将軍」とは、外宮の丑寅（北東）、常明寺「妙見堂」の妙見菩薩である。これについては拙稿「度会春彦本縁―度会氏の祖先祭祀―」でもふれている。伊勢神楽については、本田安次「伊勢神楽之研究」（著作集第七巻『日本の伝統芸能』所収）参照。

（本学人文学部教授）

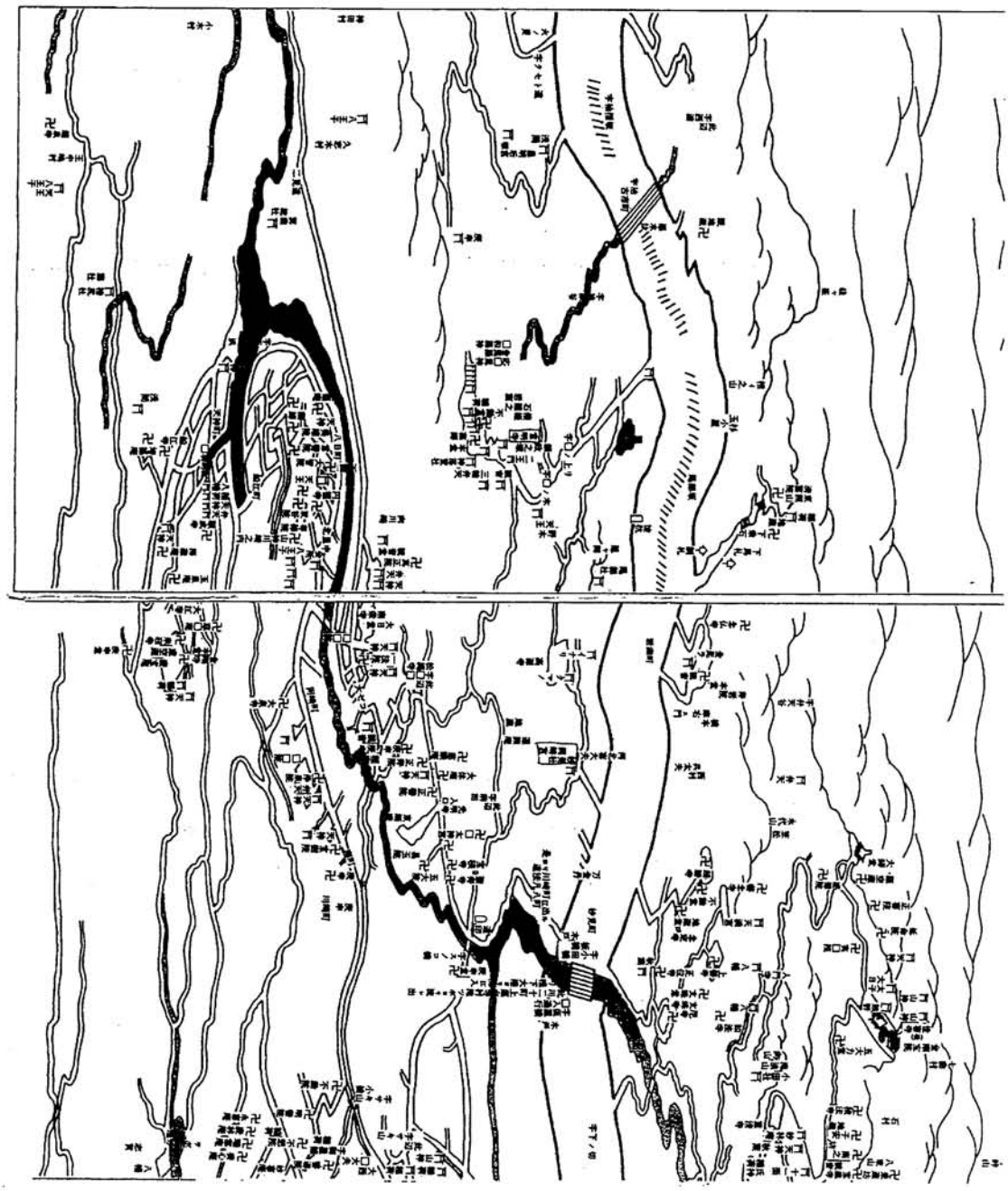

図1　「伊勢路見取絵図」（『五街道其外公開見取延絵図』所収）

図２　『別尊雑記』（第48・妙見）

図３　『別尊雑記』（第48・妙見）